

小学校外国語「話す」領域における評価のための、 教員研修用ビデオの作成と試行

松井 孝彦* 松井 千代† 杉浦 正成†† 白鳥 晃紀†† 瀨瀬 将志††

*教職実践講座

Development and Trial of In-Service Training Video on Evaluation of Speaking Skill for English language Education in Elementary Schools

Takahiko MATSUI*, Chiyo MATSUI†, Masanari SUGIURA††,
Kouki SHIRATORI††, and Masashi KOUKETSU††

*Department of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

小学校では 2020 年度から新しい学習指導要領が施行される。新しい教科として外国語が加わるが、その評価の仕方について戸惑っている小学校教員は多いように思われる。そういった教員の一助となるよう、学習指導要領に則った外国語の評価方法について、具体的に学ぶことができるような教員研修用ビデオを作成しようと考えた。その第一歩として、本稿では、学習指導要領に則った「話すこと（発表）」における観点別評価基準を作ることと、評価トレーニング用としての教員研修用スピーチビデオ作成に関する課題を明らかにすることを目的とする。

評価基準については、新学習指導要領第 2 章第 10 節「外国語」の中の「第 1 目標」及び「第 2 内容 2」に示されている各項目から「話すこと（発表）」の領域で評価可能な項目を選び、中学や高校において「話すこと」の評価で留意される音声面の項目内の優先度（評価の重み付け）を考慮して作成した。教員研修用スピーチビデオを作成する際には、全項目が A 評価になるスピーチに加え、各項目について意図的に B 評価になるようなスピーチを 5 パターン考えて録画をした。そして、4 名の小学校教員と 2 名の大学生を対象に、この評価基準を提示し、教員研修用スピーチビデオの視聴を通して評価トレーニングを行った。その結果、スピーチビデオの音声面に関して B 評価がより顕著となるような例を示す必要があることが課題として得られた。

本稿で整理された課題を基に「話すこと（発表）」の評価基準を精査し、トレーニング用ビデオを作成し直すことと、「話すこと（やり取り）」の評価基準の作成及び評価トレーニング用ビデオの作成を目指していきたい。

Keywords : 小学校外国語 評価 教員研修

I 評価に関する問題の所在と本稿の目的

1 教員の困り感とコア・カリキュラム

2020 年度から小学校では新学習指導要領が施行され、外国語が教科として扱われるようになる。そして、2018 年度からは、移行期間として新学習指導要領に則した授業を一部で行うことになる。この移行期間中の外国語における評価及び指導要録の取扱いは、これまでの外国語活動同様の文章による記述でよいこととされている。しかし、2020 年度以降は、小学校教員が児童の外国語の資質・能力を数値等により評価することが求められている。

東京学芸大学 (2016) では、平成 28 年度に小学校

教員を対象とした研修に関して、研修の参加者から採ったアンケートの結果がまとめられている。そのアンケートでは、『小学校教員研修コア・カリキュラム（試案）』を用いた全 30 項目からなる教員研修について、各研修を学んだことが研修後外国語活動・外国語の授業を行う際にどの程度役立つと思うかということについて尋ねられている。その項目の一つである「CAN-DO リスト形式の学習到達目標と評価における活用」の研修については、役立つと考えている教員が少なかったことが示されており、その理由として研修を通して身に付けることが難しい内容であると認識されたのではないかとといった考察がなされている。しかし、この考察には一部賛同するが、実のところは

†非常勤講師 Part-time Lecturer, Gifu Shotoku Gakuen University, Gifu 501-6194, Japan

††大学院生 Graduate Student, Aichi University of Education, kariya 448-8542, Japan

CAN-DO リスト形式の評価ではなく、他教科でも行われている観点別の数値評価について学びたいと考えている教員もいるのではないだろうか。実際に、小学校を訪問した際や英語の研修会の場において、小学校教員から観点別の数値による評価の方法について知りたいという要望が多く聞かれる。

東京学芸大学 (2016) では、「小学校教員研修 外国語 (英語) コア・カリキュラム」の中でパフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む「学習状況の評価」を理解することを研修内容として設定している。そこでは、5つの領域に関わる目標とその評価の在り方や、小学校の発達段階に適したパフォーマンス評価を含む多様な評価の方法、小中高を見通した具体的な領域別の目標とその基本的な考え方を理解することが求められている。現状では、関連する学会における小学校外国語の評価としては、CAN-DO リスト形式の評価に関する研究や事例が多く紹介されている。そこで、新学習指導要領に示されている育成すべき資質・能力について、今後その評価方法を示していくことは、小学校教員が評価の多様性を理解するために大切なことなのではないかと考える。

2 本研究の全体構想と本稿の目的

2020年度から施行される新学習指導要領において、小学校外国語では、児童が実際に言語を使用する姿を評価するようになるのだろうが、どういった観点で何を基準に数値化をすればよいかについては現時点で明確に示されていない。中学や高校では、実際に言語を使用する姿を評価するために CAN-DO リスト形式による評価表を作成することが求められている。しかし、実際にパフォーマンス課題を CAN-DO リスト形式で評価すると、学習指導要領で示されている育成すべき資質・能力が身に付いたかどうかを判定することは難しい。そのため、「話すこと」や「書くこと」に関してはパフォーマンス評価を行い、「聞くこと」や「読むこと」及び言語に関する知識については定期テストで評価をするという方法を用いている。では、小学校外国語でもパフォーマンス評価と定期テストによる評価を混在させることができるかどうかといえ、現時点では疑問である。

そこで、パフォーマンス評価の際に学習指導要領に示されている資質・能力が身に付いているかどうかを評価する方法を具体的に示し、小学校教員がその評価方法を用いることができるように教員研修を行うことが大切ではないかと考えた。その第一歩として、本稿では以下の2点を目的とした。

- a: 学習指導要領に則った「話すこと (発表)」における観点別評価基準を作成する
- b: よりよい「話すこと (発表)」の評価トレー

ニング用ビデオを作成する際の課題を明らかにする

II 先行事例の調査

「話すこと」や「書くこと」に関するパフォーマンス評価には、例えば ESL Composition Profile (Jacobs et al., 1981) 等といった有名なルーブリックがあるが、本稿では学習指導要領に示された資質・能力の習得とパフォーマンス評価とを関連付けた研究例を調べる必要がある。

小学校外国語活動における学習指導要領と評価とを関連付けた研究については金森 (2010) が詳しい。金森 (2010) では、(1)「学習指導要領」および「学習指導要領解説」から読み取る「外国語活動」の「評価」の視点、(2)『英語ノート指導資料』に示されている評価規準例と「外国語活動」の「評価」の在り方及び現状の課題、(3)指導要録に記される評価と授業内に実施される形成的評価の使い分け、(4)指導要録に記される評価の観点・規準例の提案、(5)多様な評価方法を用いる工夫としての、「外国語活動」の評価に関する問題点とその解決策について考察している。(1)において学習指導要領の「1 目標」及び「2 内容」の文言を丁寧に読み解き、(2)において(1)と教材の学習内容とを結び付け、(4)においてその教材を通して得られた学びの成果の、評価の観点と規準例及び基準例を示す一連の流れは、本研究においても参考になると考える。

中学、高校の授業における英語の評価については林 (2017) が詳しく、語彙知識及び4技能に関わる定着の度合いを判定する方法として、伝統的な評価方法から ICT を用いた評価方法までを紹介している。しかし、学習指導要領における育成すべき資質・能力に対して、穴埋め問題や多肢選択問題等の客観的な評価方法については詳細に述べられているものの、スピーキングやライティングの直接的評価やパフォーマンス評価については、複数の教員で評価をして評価者間信頼性を高める努力をすることが望ましいと書かれているのみであり、各資質・能力の評価方法については詳細に示されていない。松浦 (2010) では、パフォーマンス評価における評価項目と、4つの観点による観点別評価との関係について解説がされているものの、評価規準及び評価基準までは示されていない。

以上のように、学習指導要領に示された資質・能力の習得とパフォーマンス評価とを関連付けた研究例は、調べた範囲では多くはなかった。そこで、金森 (2010) と、筆者らが日頃の教育実践の中で使用していた資質・能力を評価するためのルーブリック (愛知教育大学附属名古屋中学校, 2008) を参考にして評価基準を作成しようと考えた。

Ⅲ 新学習指導要領に則った評価基準作成

1 外国語の目標について

2020年度から施行される新学習指導要領の「第10節 外国語」では、その目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としている。そして、資質・能力として以下の3つの柱を示している。

- (1) 外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。〔知識及び技能〕
- (2) コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。〔思考力・判断力・表現力等〕
- (3) 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。〔学びに向かう力・人間性等〕

また、上記外国語の目標を踏まえ、英語として「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の5つの領域別目標が示されている。新学習指導要領によると、各領域の言語活動を通して上記(1)及び(2)に示される資質・能力を育成し、その過程で(3)に示される資質・能力を育成することが求められている。

2 身に付ける資質・能力について

新学習指導要領「2 内容」には、第5学年及び第6学年で身に付けることができるよう指導する項目として、以下のものが挙げられている。

〔知識及び技能〕

「音声」「文字及び符号」

「語、連語及び慣用表現」「文及び文構造」

〔思考力、判断力、表現力等〕

「身近で簡単な事柄について、伝えようとする内

容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うこと」

「身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりすること」

また、これらを身に付けさせるために、言語活動や言語の使用場面、言語の働きを意識的に取り上げるよう求めている。

しかし、「2 内容」には学びに向かう力・人間性等に関わる資質・能力が示されていない。学びに向かう力・人間性等については「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」と定義されている。また、外国語の目標には「他者に配慮しながら」という言葉も見られる。これらのことから、学びに向かう力・人間性等については、「声の大きさ」や「話すスピード」等といった他者への伝え方を中心に考えていくこととした。

3 「話すこと（発表）」に関する評価基準例作成

2で述べた資質・能力に関して、まず評価項目を設定した。発表をスピーチと仮定した上で、筆者らで話し合った結果、評価項目を以下のものとした。

〔知識及び技能〕

「音声」「語、連語及び慣用表現」

「文及び文構造」

〔思考力、判断力、表現力等〕

「テーマに対する必要な内容及び自分の考えや気持ち」

「言語の使用場面や言語の働きとして必要な表現」

〔学びに向かう力・人間性等〕

「声の大きさ」「話すスピード」「明瞭さ」

「アイコンタクト」

「ジェスチャー及び写真や絵の使用」

「既習の語彙や表現の使用」

さらにここから、児童の発表を、録画をもとに評価できる項目とその場で評価すべき項目とに分けることを考えた。そして、スピーチ発表のその場で評価すべき項目は「語、連語及び慣用表現」を除いた項目とした。これは、中学や高校での教員経験がある筆者らが実際にスピーチの評価をした経験上あまり多くの評価を一度に見ることができないことから、この項目を削除した方がよいと判断したためであった。

次に、各評価項目について評価基準を設定した。通常評価基準を決定する際、「概ね満足できる」に該当

する評価を言語化するが、今回もそのようにした。その際、外国語活動から連綿と続く児童の学びの過程と、ある程度準備が可能であるスピーチの特性を筆者らで議論し、以下のような B 基準を設定した(表1)。

表1 「話すこと(発表)」における B 評価基準例

音声	音声にいくらかミスがある
文及び文構造	1つでもミスがある
考え・気持ち等	1つでも欠けている
使用場面・働き	1つでも欠けている
他者への配慮	配慮がないものがいくらかある

「音声」については、「(ア) 現代の標準的な発音」「(イ) 語と語の連結による音の変化」「(ウ) 語や句、文における基本的な強勢」「(エ) 文における基本的なイントネーション」「(オ) 文における基本的な区切り」の何れかにいくらかのミスがある場合は原則として B 評価とした。全て適切である場合は A 評価とし、ミスが多い場合は C 評価とした。このとき、中学や高校でのパフォーマンス評価における音声面の優先度を参考にして、(ア)から(オ)の 5 つの項目について「(ア) < (イ)(ウ)(エ)(オ)」という重み付けを行った。つまり、(ア)について多少カタカナ発音があったとしても、(イ)から(オ)にミスがない場合は A 評価とすることとした。(イ)から(オ)に関しては、ミスがあると意味が伝わらなかつたり間違ったりしてしまうことがあることから、(ア)よりも重要であると考えた。

「文及び文構造」「考え・気持ち等」「使用場面・働き」については、スピーチの場合ある程度事前に準備が可能であり、なおかつ全体で6から7文と短いため、1つでもミスがあつたり欠けている情報があつたりした場合は B 評価とした。全てにミスがない場合

は A 評価とし、ミスが多い場合は C 評価とした。

「他者への配慮」については最も抽象的になったが、「声の大きさ」「話すスピード」「明瞭さ」「アイコンタクト」「ジェスチャー及び写真や絵の使用」「既習の語彙や表現の使用」について、他者への配慮がないものがいくらかある場合は B 評価とした。全てにおいて配慮がある場合は A 評価とし、配慮がないものが多い場合は C 評価とした。なお、「ジェスチャー及び絵や写真の使用」が必要ないテーマの場合は、これを評価項目から除くこととした。

IV 評価トレーニング用ビデオの作成

設定した評価基準を基に、各項目について A 評価か B 評価かを判断するトレーニングのためのスピーチビデオを作成した(表2)。

パターン 1 (1-1 と 1-2) は、全てが A 評価になるような模範的なスピーチとした。英文は以下の2通りであった。

1-1 ※表2における●-1にあたるスピーチの原型

Hello, everyone. I'm Masa. My best memory is my club activities. I was a member of the basketball club. We practiced hard every day. It's my best memory. Thank you.

1-2 ※表2における●-2にあたるスピーチの原型

Hello, I'm Kouki. My best memory is my school trip. We went to the mountains. We enjoyed hiking. It was fun. Thank you.

パターン 2 以降では、ある項目を意図的に B 評価になるように操作をして録画した。

パターン 4 では、考えや気持ちに関わる英文を除い

表2 評価トレーニング用スピーチビデオの内容

パターン	音声	文	文構造	考え・気持ち等	使用場面・働き	配慮	意図的操作
1-1	A	A	A	A	A	A	なし
1-2	A	A	A	A	A	A	なし
2-1	A	A	A	A	A	B	アイコンタクト×/小さめの声
2-2	A	A	A	A	A	B	早口/アイコンタクト×
3-1	B	A	A	A	A	A	すべてカタカナ読み
3-2	B	A	A	A	A	A	イントネーション×/区切り×
4-1	A	A	A	B	A	A	考え・気持ちの表現を抜く
4-2	A	A	A	B	A	A	考え・気持ちの表現を抜く
5-1	A	A	A	B	B	A	最初の挨拶を抜く/気持ちを抜く
5-2	A	A	A	B	B	A	最後の挨拶を抜く/気持ちを抜く
6-1	B	A	A	B	B	B	2-1, 3-1, 4, 5-1 全て
6-2	B	A	A	B	B	B	2-2, 3-2, 4, 5-2 全て

たスピーチを作成した。具体的には、4-1 では“hard”及び “It’s my best memory.”を、4-2 では“ We enjoyed hiking. It was fun.”をそれぞれ除いた。

パターン5では、スピーチの場面において必要な英文を除いたスピーチを作成した。具体的には、5-1 では、4-1 からさらに“Hello, everyone. I’m Masa.”を、パターン 5-2 では、4-2 からさらに “Thank you”を、それぞれ除いた。

V ビデオ視聴による教員研修

1 教員研修の日程等について

- ・日 時： 2017年11月18日 13:00-16:00
- ・場 所： 神戸市
- ・参加者： 小学校教諭4名及び大学生2名
- ・研修内容：
 - 13:00-13:50 小学校外国語及び評価の概略
 - 14:00-14:50 新教材の解説
 - 15:00-15:50 評価トレーニング
 - 15:50-16:00 まとめ

2 評価トレーニング中の活動

まず、評価項目と評価基準の確認を行った。

その後、パターン 1-1 及び 1-2 のビデオを再生し、全項目 A 評価のイメージを把握した。

次に、パターン 2-1 のビデオを再生し、「個人で評価」→「ペアでそれぞれの評価とその理由の確認」→「ペアによる評価とその理由の決定」→「全体発表」の順で評価トレーニングを行い、最後に筆者ら研修講師からの解説を聞いた。

以下、同様のトレーニングを、パターン 3-2、4-2、6-1 のビデオを視聴しながら行った。

3 評価トレーニングにおける参加者の様子

パターン 1-1 及び 1-2 については、全員が全項目 A 評価になることについて納得をしていた。

パターン 2-1 については、アイコンタクトを取らずに淡々と話す様子から、全員が「他者への配慮」の項目を B 評価としていた。しかし、1名がそれに加えて音声も B 評価としていた。ペアでそれぞれの評価を話し合わせた際、B 評価とした理由について「他者への配慮ができていないと全体の印象がよくないように感じ、音声についてもイントネーションがないように聞こえた」と述べていた。ペアによる評価を決定する際には、パートナーの「『他者への配慮』以外は、全部 A 評価だった例と変わらなかった」という意見に賛成し、音声を A 評価とすることに賛成した。

パターン 3-2 については、音声について A 評価と B 評価が分かれる結果となった。A 評価とした参加者は「イントネーションや区切りがさほど不自然には思われない」という感想を述べていた。評価が分かれたペ

アの話し合いでは、「普段この程度であれば A 評価にしている」といった意見や「評価基準から判断すると B 評価であるように思われる」といった意見が聞かれた。最終的には全てのペアが B 評価としていたが、研修講師であった筆者らの解説を聞いてもなかなか納得できない参加者もいた。

パターン 4-2 については、2名が考えや気持ち等を A 評価とし、使用場面・働きを B 評価としていた。この2名は、全体発表における他のペアの意見や研修講師の解説を聞くことで A 評価と B 評価が逆であったことを納得できたと述べていた。

パターン 6-2 については、全員が作成した意図通りの評価をすることができた。音声面を B 評価にした理由については、カタカナ発音の多いスピーチであると、全員が同じ指摘をすることができていた。

IV 考察及び課題

本稿では、「a: 学習指導要領に則った『話すこと（発表）』における観点別評価基準を作成すること」と「b: よりよい『話すこと（発表）』の評価トレーニング用ビデオを作成する際の課題を明らかにすること」を目的に実践研究を行ってきた。

a に関しては、一応の成果が得られたと考える。評価項目に関しては、特に金森 (2010) の先行研究を参考に選ぶことができたため、概ね適切であったと考える。しかし、基準に関しては再考する必要があるのではないかと考える。これは、評価トレーニング中において参加者が音声の評価について戸惑う様子が見られたからである。もちろん、音声の評価に関して A 評価と B 評価を明確に区別できる基準を作成することは難しい。今回は筆者らの実践事例のみを参考に行っているため、今後さらに基準の設定に関する事例を調査し、基準を精査していく必要があると考える。

b に関しては、音声の評価において A 評価と B 評価を明確に区別できるようにすることが課題であることが分かった。新学習指導要領では、音声について 5 つの項目が挙げられている。それぞれの項目について A 評価と B 評価を明確に区別することができるようなスピーチ例を示すことは、評価トレーニングとして極めて有効であると考えられる。そして、5 つの項目に関する違いにある程度習熟した後、例えば 2 項目が B 評価になるようなスピーチを示すというように、スモールステップを踏みながら評価のトレーニングを行っていくとよいであろう。その上で A 評価か B 評価かが曖昧に思われるようなスピーチを示し、評価者間信頼性を高めるような評価トレーニングは最後に行うようにするとよいと思われる。

参加者からは、全項目が A 評価になるスピーチ例を示した後に、一つずつ B 評価になるスピーチ例を示すという手順が、B 評価の具体性を理解するために

効果的であったという感想を得ている。今後は、課題として述べた点を踏まえた教員研修用ビデオを作成し、小学校教員の、外国語の評価に対する不安感を軽減することができるような支援をしていきたい。

引用文献

- 愛知教育大学附属名古屋中学校, 2008, 「英語科のルーブリック」, 『研究紀要 子どもの知を拓く授業の創造—思考を働かせることを通して—』第 50 集, 182.
- 林伸昭, 2017, 「中学・高校における英語 4 技能の評価--伝統的評価から ICT による評価まで--」, 『宮崎公立大学人文学部紀要』第 24 卷, 137-154.
- Jacobs, H.L., Zingraf, S.A., Wormuth, D.R., Hartfiel, V.F., and Hughey, J.B., 1981, *Testing ESL Composition: A Practical Approach*. Rowley, MA: Newbury House Publishers.
- 金森強, 2010, 「小学校「外国語活動」の評価のあり方を考える」, 『ARCLE REVIEW』No.4, 103-117.
- 松浦伸和, 2010, 「習得・活用を目指す英語授業の考え方とその設計」, 『日本教材文化研究財団研究紀要』第 40 号, 25-29.
- 東京学芸大学, 2016, 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成 27 年度報告書』, 2017 年 11 月 27 日, <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/wp-content/uploads/2016/03/h27all.pdf>
- 文部科学省, 2017, 「小学校学習指導要領」, 2017 年 11 月 27 日, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2017/05/12/1384661_4_2.pdf